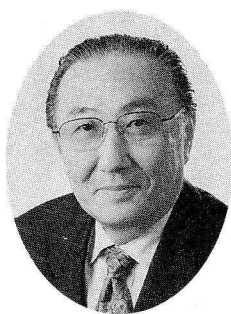


幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報 No.23
平成14年3月20日

横浜能五十回の年を迎えて



会長 新堀豊彦

平成十四年はわが横浜能楽連盟にとって、記念すべき年であり

昭和二十三年七月に発足した当連盟は、既に平成十年（一九九八）に創立五十周年を迎え、盛大に記念行事をくり広げましたことは、まだ記憶に新しいところであり、また記憶に新しいところではありますが、当連盟が横浜における能楽の普及発展のため開催して参りました横浜能は、昭和二十八年（一九五三）十一月第一回の公演を行なって以来、本年度で実に第五十回の演能と相成るわけであり、

連盟が存在し、横浜能が一年たりとも休まず、こうして継続されて来たことは、これを支えて頂いた会員各位、能を愛する市民の皆様、の暖かい御支援があったればこそであります。そして、横浜能が開催されて来たこと、が、横浜能楽堂建設の原動力になったことも間違いではありませぬし、今日の横浜における能への関心が大変大きくなって来た大本でもあります。第五十回横浜能が各流宗家や有力職分の先生方の力で、それこそ歴史に残る名舞台を展開させることを期待し、さらなる御協力をお願い申し上げます。

第17回横浜五流能楽大会報告

当番幹事 杉山 淑明
観世流梅若会

今大会に能一番（観世流後藤ヨシ子氏の「船弁慶」）&舞囃子五番を出すことは早いうちに決まっていた。

観世の鈴木力雄氏がプロ（シテ方・ワキ方・囃子方）及び後藤ヨシ子氏の折衝窓口となり、梅若と連携して、能・舞囃子の「出演時間帯」及び各流派の「配分時間」等、骨格部分をまとめられた。

〆番組の配付を急いで欲しい〆との要望に依って、校正・印刷のピッチを上げ、予定の一月前に完成、配付に漕ぎ着けた。

更衣室の部屋割は、いつもは楽屋・研修室の全部を、バランス良く利用しているが、今回はプロの控え室で過半を占めた為、男性は第二舞台を、女性は研修室2・3・4を各流派の共用で対処した。更衣室の割り当てはこれが限界。

設営（玄関内フロアに受付のテーブルをセットする）では、開場前の逼迫した中であって、連盟役員の方々が積極的に手伝って下さった。他にもみんな大会を支えて行こうとする姿勢が随所に見られて深い感銘を受けました。

能楽堂は建物のつくりが複雑

なの（毎回案内標示をしている。今回は、この作業に三人で一時間以上かかった。本当にご苦労様でした。

関係各位の御協力により、好評・盛会のうちに大会が終りましたことを厚く御礼申し上げます。有り難うございました。

尚、幽玄22号に（三代で舞う「船弁慶」と題して、後藤氏が寄稿されたことを付記致します。

五流大会・松舞台の裏方

常務理事 望月 悦夫
金剛流

当能楽連盟が主催している素人の大会は横浜五流能楽大会が十七回、五流交流のつどいが五回を重ねました。

能楽連盟発足当初に先人たちによって昭和二十四・五年頃、磯子の雨月荘で催された「能楽コンクール」が始まりのようです。

能楽大会は昭和六十一年に、「第一回各流合同謡曲大会」として再発足しました。当初は久良岐能舞台が主に使用され、各流の大勢の参加者で楽屋も見所も所狭しの賑わいで、他流の謡や仕舞を楽しみ交流を深めておりました。

平成八年に待望の横浜能楽堂が開館し、以降は正に真正正銘の松舞台で演じて頂けることに

なりました。連盟理事会は、この欲びを更に多くの人々と翌年には「五流交流のつどい」を発足し、年二回の大会を毎年開催しております。

この大会の裏方は、連盟参加の各流（六会派）が輪番で勤めることにしており三年に一度の割合で運営当番が巡ってきます。去る二月九日の「第五回五流交流のつどい」は私共金剛流が担当いたしました。

開催日の約半年前の昨年十月に、各流の担当理事に開催要領と出演申込用紙をお配りし、出演者募集を依頼しました。各流の割当て時間内での出演者決定は、各流担当理事の悩むところでもあります。

今回の出演曲目は四十六番に及び、午前九時半（開館は九時）から四百八十分で終曲となるよう計画しました。番組作りは仲々の難事です。出演順番は編成責任者に一任させて頂いており、ますが特別の事情があれば番組原稿を各流の理事にお配りする前なら受けることができます。曲目は他流と重複することが少なくありませんが趣きもあり調整はしないこととしております。番組の書式は各流儀のしきたりを尊重することにしており、これを詳細に正しく表わすのは容易なことではありません。また

名前の誤りは是非避けたいと思
います。文字も読みも難しい
と思われる場合は申込み時に配
慮を頂きたいと思えます。各流
の担当理事に下刷校正と、完成
後の出演者への配付をお願いし
ております。

事前準備の一つに昼食弁当の
申込み受付と注文があります。
現在は、能楽堂二階のレストラン
は常時営業しておりません。
主催者の要請により当日のみ
営業しますので纏まった数は予
約して頂いております。

当日、受付や控室の設定と楽
屋への案内の張り出しは開館・
入場と併行して行っています。
能楽堂の楽屋玄関は防犯上閉じ
ております。本来一般の人は入
れない場所であり、また防火構
造になっているので、何回来て
も判りにくいという声が聞こえ
ます。また楽屋は一般常識と違
ってスリッパは使用できません。
揚幕内側の鏡の間に入るには白
足袋が必要です。ご承知くださ
い。

当日裏方が最も気使うのは進
行です。切戸口に常時三・四人
配置して切戸口と、出番の揃い
の確認をしています。

毎回持時間の超過が多く、進
行が遅れて後の出演者に迷惑が
ありましたが、今回は皆様のご
協力のお陰で予定通り附祝言を

誦い納めることができました。
ありがとうございます。

岡本房雄師「重要無形文化財
総合指定保持者」に認定される

高岡 幸彦

岡本先生は何時も能楽連盟の
理事會に傍聴者として出席され
ているので理事の皆さんは顔な
じみである。

能楽連盟の役員は皆素人であ
る。そこで岡本先生の様な玄人
の先生に聴いて頂く事は心強い
ことであり、又素人には判らな
い様な事はその場でお聴きでき
るので大変有難い事である。

今迄能楽連盟の理事會に玄人
の先生が出られた事はない。私
の前任者の伊藤文治先生も師範
になられたのを機に観世流の世
話係の役を辞せられた。当時は
能楽連盟は横浜能を開催する事
だけが仕事であったが、能楽連
盟で定めようとする予定が当時
これを扱っていた観世會の意向
とあまりかけ離れていたのでは玄
人の先生では責任がとりきれな
かったというのが事実であった。

我々素人が引継いでもこの問
題は残った。具体的には「謝金
の問題」「日程の問題等」であつ
たが、いかにこの格差をなくす
かが観世の世話人の仕事であり
悩みでもあった。そう、問題

を出来るだけスムーズに解決し
ようと岡本先生は御自分から傍
聴席について下さったのである。

この岡本先生が昨年七月に
「重要無形文化財総合指定保持
者」として認定された。本当に
おめでたい事であり、私共とし
ても嬉しい限りである。又昨年
無形文化財の認定を受けた観世
の先生方はお家元の御弟、観世
芳安師、芳伸師を初めとして二
十一人おられる。その中で先生
は最高年令である。それは他の
先生方は生まれながらにして能
楽師の家に生まれ、後継者とし
て幼少の頃より育てられたので
あるが、岡本先生も小学生時代
より謡曲、仕舞は稽古してこら
れたがそれは趣味としてやって
おられたので、横浜商業高校
(Y校)を卒業後約十年間はサ
ラリーマンの生活をされたので
ある。二十七才に結婚の折、仲
人が観世元昭師であったので元
昭師の薦めにより元昭師の内弟
子として入門されたのである。

その後他の人々より年を重ねて
のきびしい修行は大変な御苦労
であったと想像される。その苦
労が実って現在観世流の能楽師
の中核の一人として活躍されて
いる事は心強い限りである。岡
本先生の行くに幸あれと祈ら
ずにいられない。

静と動

観世流 市村 士久

弁慶の呼掛に幕は上った。ワ
ァーッ綺麗！見慣れている筈の
舞台だが、明りに照らされ光に
輝く舞台は一種冬の朝日に照り
輝く一面の白銀の世界を連想さ
せ、毎回真新しく思える程ワク
ワクする無限の美しさは感歎に
ほかならない。又その感動の多
寡は直面の場合よりも、若女、
静の面の様に小さな目の奥から
見る舞台は最高である。面の内
部は独り取り残された牢獄感が
あり、その暗闇の小さな一ツに
合わさった目の穴から覗き見す
る如き外部の世界は、ドキドキ
して好奇心に満ち溢れた(幼少
の頃、和室の障子を指を嘗め穴
をあげ恐る恐る覗き見した)あ
の懐かしい幼児体験を思い起さ
せてくれるスリル満点の面白さ
である。

また違いがあった。能面師田中
秀朋さんが極度に目の悪い私の
為に少々大きめに開けてくれた
からであった。そして鼻の穴、
口から見える木漏れ日のような
光は、スポットライトのあるム
ードルーム感である。一定の決
められた範囲を凝視するかの如
きやや大きめの目が真摯な観客
の目と合致したとき、心気高揚
のなかで思わず足が竦み言い知
れぬ緊張感が身を引き締めるこ
と屢々である。真面のときより
も狭まれたエリアながら確り見
えるとき、観客の顔の表情まで
キヤッチして手応えを感じるも
のである。

さて幕内から橋掛りへ、更に
舞台正中へと一足一足静かに進
むこの間は静寂且つ、観客の熱
気と視線を全身に感じるときで
緊張度も最高潮に達する長く遠
く感じる道程である。

殿(義経)の御前に座し、殿
の第一声が聞けたときへたへた
とした安堵を覚える。

だがしかし休んでは
おられない、眼前に居
るのは恋慕止み難き最
愛の夫、私は妻の静な
のだ。と言ひ聞かせる。
義経をお諫めし惜別の
舞を舞い、おそらくは
殆どの観客がじっと見
入って下さったことに



有難うと言いたい気持ちを残しながらも泣く泣く中入りとなった。史実の静は、尼ヶ崎大物浦へ到着以前の橋で頼朝の追手に捕えられ都へ戻されたというから作者の意図で、静のあとに動として話を関連づけたこの能はなんと素晴らしいフィクションとして演ずる者にも楽しさを与えてくれたように思う。

急ぎ剥ぎとられる如く一秒を惜んで知盛の衣装に着替えさせてくれるのだが、私はなかなか静の気分から脱却できない。そこで私は女の執念を燃やし続けて「我が夫、義経さんは上手言つて私を別れさせたけど実は、好きな女が居たんだわ。悔しい憎い、殺してやるうー。」と言う気持ちを煮え滾らせ襲いかかっていくことにした。

狂言師の方の海波荒れ狂う情景表現は素晴らしく端切れよい声が聞えてくる。古来、大物浦は上流からの烈しい流水で三角洲ができ、瀬戸へ注ぎ込むあたりは海波荒れ狂う海の難所と言われ人々は神仏に加護を祈って出航したことから、この海には源平合戦で滅びた平家の怨霊が住みつきその祟とされていたと言う。

しかし太鼓も加わって激しく鳴り響く囃子は闘志を燃え滾らせ踊り出る気分を盛り上げ動

としてのクライマックスに到達する。ずーっと心地良く居眠りしていたライオンが獲物の足音に目を覚まし、闘志に目を輝かしている様子が脳裏に浮かんでくるような静と動の極付けである。私がお招きした多くの外国の方に予め英和文の解説を差しあげておいた為か、後日静の悲しみのシーンは、胸一杯になり涙が込みあげていた等とおっしゃって下さったのは私自身少

々りアリテイーに演じたつもりであったから喜びに絶えない。知盛が好きと言うおハガキを戴いた時は、恥ずかしい思いに入でまだまだ勉強せねばと思っております。

この大曲をご指導下さった師並びに多勢の観客の皆様へ「幽玄」誌面拝借し厚く御礼申し上げます。

極致の分水嶺

観世流 小倉 和恵

六条御息所は全てを失う。源氏の愛、東宮妃としての誇と地位、教養と美しさ、あらゆるものが移ろい果てる。永遠のものはない。

常ならぬことを受け入れていくことに御息所の悲哀の本当の意味での困難がある。

御息所の心には、思慕、恨み、

嫉妬、嘆願、絶望が一挙的に到来する。「憂き世は牛の小車の、廻るや報ひなるらん」「物憂き野辺の早蕨の、萌え出で初めし思ひの露」受け入れようとする心と諦めきれぬ心、その葛藤。源氏に顧みられない悲しさ、正室葵上へのかの日の恨みとやみがたい妬心、そして何よりも己の執着に翻弄され凶暴とさえ呼べるような極致へと駆り立てる

(愛)の体験は、知と理、深い教養、高貴な矜持を生きた御息所には耐えられない(含羞)の経験である。この時代ほど(含羞)が(艶)の花を咲かせた時代はかつてなかった。

加えて小聖の調伏によって御息所の悲哀は行場を失う。

キリキリと葛藤する苦しさとする心の重量を、「泥眼」は負いきれない。かくして怨霊の姿は、恨み、嫉妬を突き抜けて蒼々と燃える「般若」へと結晶する。

「般若」はいつも最後にある。それは、「般若」が「凶暴とさえ呼べるような極致」の形象だからだ。

御息所は愛の対象をことごとく手放さなくてはならない。そのことを承知し受け入れなければ、己の安心がないことを理性は知っている。しかし、得心するまでには「もの思ふ人の魂は

げに」がるるものになむありける」と未練を語り、「打たではかなひ候ふまじ」と狂乱するほどに「愛惜」を舞う濃縮された時間が必要であった。到来する断念の時を迎える顔を、人はもつていない。その分水嶺を超える一瞬、人の顔は凌駕される。「泥眼」は凌駕されるべき人の顔。だから「般若」は(極致)なのだ。

この(極致)を御息所は生きた。御息所は、女ゆえのしこもやんごとなき女ゆえの堅忍、宗教上の禁忌、宮中のしきたり、時代の男女観などをひとつ身に引き受け、人の世における喪失の受諾と断念という根源的体験の光景「原」悲の光景を見せし。打杖を振り上げ、鱗箔、緋袴を纏った女の宿業の立ち姿として、(悲しみの姿)を見る人の心に深く刻み込む。

人の世には遂げられぬものがあり、また一方で一瞬にして成るものがある。永遠の栄華、愛、それらにはあり得ない世の理のゆえに、あらかじめ喪失されている。それを知りつつなお断ち切れぬ己の執着を御息所はもつとも深く悲しんだ。

業火の愛執と思慕、恨みの全てを渾身こめて生きるとは、尋常な人の姿ではできぬこと。尋常でない姿に遂げられぬ悲しみ

をみな集めたとき、御息所は分水嶺を超えた。「よろづのあはれを思し棄てて、ひたみちに出て立ちたまふ」(源氏物語「賢木」)御息所の姿が一際凄惨に、且つ美しく燃えるのは、この一瞬である。

あの燃え上がる蒼い炎に浄化されるために、私はまた能楽堂に足を運ぶ。

先生の声を聞いてみて?

喜多流 武枝 早苗

友人に誘われるままに久良岐教室・出雲康雅先生に入門したのは五年前。新入生は先生の前でと座らされ、その声のものとごさに只々口元を見つめたまま初日の稽古が終ってしまつたのがまるで昨日のようだ。日本のオペラだと感じ、その歴史は西洋のそれよりも更に古いと聞いて深い感銘を受けた。その後、紅葉狩をおさらい会で謡うことになり、何か参考になるものとは見つけたのが横浜能楽連盟創立五十周年第十四回横浜能楽大会の紅葉狩だ。受付で友人とバツタリ出会つたその方に「母が紅葉狩のシテを演ずるの」あまりの偶然に驚きながら女性四人の透き通るような謡の美しさに我を忘れて観入つた。その後友人に頼み込んで無理を押ししてビ

デオも見せていただいた。
 そのお母様が梅若流・横浜能楽連盟副会長の堀内万紗子先生である。流派の違う修業一年足らずの私に優しいお心遣いを頂けたのはとても大きな宝物となっている。能のことならどんなことでも観たい・聞きたい・知りたい一途の私が出雲先生に大変なご迷惑をおかけしたと気付いたのは大分後になってからで今でも反省をしている。

私が入門した年の暮に「みんなだで謡う高砂の会」が始まった。指導をされるのは出雲先生なので不安は無い。小学生から八十を越える方、アメリカの二十代の女性は赤い振袖で出席され大きな声で朗々と謡われた。年も流派も国も超え共に謡うのは清々しくとても気分が良い。五回

目の今年が高砂神社で謡う「高砂」ツアーとなった。このまま続いて欲しいと思っている。
 映画を観ればその中に「藤戸」の能が、TVの中では「人生五十年」。能は歌舞伎に似ていると思ったのは誤りで歌舞伎の基が能だったとは……。現代文化は今も室町時代の影響を連綿と受け続けているにも拘わらず、いざ謡う段になるとその音どりのら簡単にできない情無さを痛感させられた。明治以降の日本は西洋に追いつけ追い越せと必死のあまり、日本の大切な文化さ

へ忘れたかのように見えるが、実は生活の中に深く溶け込み息づいていたのだ。学校では西洋音楽しか教えられていない（実は音痴？）私にとって謡は五年たつてもまだまだ苦痛の種だ。そんな中で明るいニュースは今年四月から日本古来の伝統芸能が学校教育に取り入れられることだ。これで私のように謡の難しさに泣く人も減ることだろう。能や謡をお経とまちがえる人もいなくなるだろう。
 今や能は世界文化遺産になったのだから。
 これからも明るく謡って楽しく舞い続けたいと思う。

能「通小町」を観て

常務理事 秋山 尚
 宝生流

第四十九回横浜能では我が宝生が演能当番となり、当流の重鎮職分である高橋章師が「通小町」を勤められた。
 高橋師は御存知のとおり、人間国宝の指定を受けられ昭和の名人と言われた故高橋進師の御長男であります。小町物五曲の中で四番目と位置付けされたこの曲を、どのように演じられるのか大いに期待された。
 ツレ山内崇生師（当流の若きホープ）の「木の実之段」で始まった。謡い中心では

かせ処なので大事な場面である。焦がれる男を百夜も通わせた、したたかで凄艶な女にしては若干淡泊な味となったが、後半のシテとの掛合いではこれが活きている。
 シテの橋掛りの出は無地鬘斗目を被り中腰のまま出てくる、これは通小町の独特な出であり、これから何がおこるのかと緊張と期待の一瞬である。舞台も進み百夜通いの苦しみを述べるあたりから気迫が伝わってくる。「独寝ならば辛からじ」と平臥し「搦の数々」で指を折り数えしぐさは、恋い焦がれる思いが込み上げる。満願成就の喜びから「花摺衣の色がさね」と最高のオシャレをして会いに行くくだりは、シテと地謡との気合の入った形と謡は圧巻であった。この所を我々素人の仕舞では掛合いに押され形が荒くなってしまう。さすが職分芸ともなれば急しい形でもしつかりした動きであり敬服に値する。

能楽宮座より

四月〜七月の公演

横濱能楽堂では以下の通り公演を開催致します。

【第三十四回普及公演】

四月二十九日（月・祝）午後二時。能「羽衣」（観世流）岡久広、狂言「鬼継子」（和泉流）野村与十郎。正面三千七百円、脇正面三千二百円、中正面・二階二千七百円。チケット発売中。

【第二十四回定期公演】

六月二十二日（土）午後二時。能「雪」（金剛流）豊嶋訓三、狂言「菌」（大蔵流）善竹十郎。正面四千円、脇正面三千三百円、中正面・二階二千八百円。チケット発売は五月十八日（土）窓口で午後二時から、電話は午後二時三十分から。

【第十三回特別公演】

七月七日（日）午後二時。能「景清」（宝生流）近藤乾之助、狂言「茶子味梅」（和泉流）野村万作。正面五千二百円、脇正面四千円、中正面・二階三千三百円。チケット発売は六月九日（日）窓口で午後二時から、電話は、午後二時三十分から。

お問い合わせ・お申し込みは、二六三―三〇五五まで。
 横濱能楽堂は四月より年末年始（十二月二十九日から一月三日）や施設点検日（月一回程度）以外の日については、無休化を実施致します。

《編集後記》

▽我が国の伝統芸能のトップを切つて「能楽」が《世界無形文化遺産》の指定を受けました。能楽人口の裾野を拡げていこうと言う能楽連盟の基本姿勢にとつて追風となり、普及事業の強化が期待される。

▽この度、岡本先生には「重要無形文化財総合指定保持者」の認定を受けられました。
 高岡副会長からお祝いの寄稿がありました。ご紹介いたします。

▽各流派のご協力をいただき、原稿は予定を超えて集まり、一部は次号に送らせていただきました。ありがとうございます。

横濱能楽連盟 連絡先

◎文書郵送又はFAXの場合
 〒233-0013 横濱市港南区丸山台二丁目 二九一七 新堀方
 FAX ○四五―八四四―二九〇三
 ◎電話の場合
 横濱能楽堂 原田由布子
 TEL ○四五―二六三―三〇五〇